

小学生・中学生のテスト観と教師によるテスト答案添削

福地 雅大・丸山 剛史

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日

小学生・中学生のテスト観と教師によるテスト答案添削[†]

福地 雅大*・丸山 剛史**

宇都宮大学教育学部卒業生*

宇都宮大学共同教育学部**

本報告は、教育評価研究の一環をなすものであり、アンケート調査により小・中学生のテスト観を、教員へのインタビューによりテスト答案添削の事例を検討した。テスト観に関しては小学生段階からテストは自身の学習内容理解把握のために行うものと解されているが、学年が上がるにつれ他の要素が入り、テストの目的が複合化すること、テスト答案添削に関しては自己評価能力育成を意識して答案添削等に取り組む教師が存在することが確認できたが、コメント記入量は児童生徒数等により変わることが示唆された。

キーワード：テスト観、テスト答案添削、教育評価、小学生、中学生

1. 研究の目的及び方法

本報告は子どもの自己評価能力育成に資するテスト答案採点のあり方に関する教育評価研究の一環をなすものである¹。本報告では現代の小学生・中学生のテスト観を検討しつつ、教師によるテスト答案採点・添削の現状の一端を明らかにし、テストが子どもの自己評価能力を高め、学習促進の手段となるような採点のあり方を考察することを目的としている。

仮説実験授業を提案した科学史研究者・板倉聖宣は『教育評価論』（2003）等を著し、教育評価とのかかわりにおいてテストのあり方に言及した文章を紹介している。板倉は大正期の三無主義教育（「無試験・無採点・無賞罰」）について言及するなかで官立神戸高等工業学校の事例を引用し、テスト答案採点・添削の事例を紹介している²。

「…理解の如何を知るにはたびたびテストするほか工夫はない。加うるに、テストの答案はすぐに添削採点して生徒に返すから、生徒は答案を見て大い

に啓発される。テストは生徒をおどす道具ではなく、生徒を教える道具である。そのためには答案は添削して返さねばならぬ。ただ採点して生徒の力量を測るにとどめるのは不親切なやり方である。」

「テスト」は「生徒を教える道具である」とは当然であろうが、これを成り立たせるにはテスト答案の添削が重要になることが示唆されている。

わが国の教師の日常においてもテスト答案の採点・添削は行われていると思われるが、教育評価研究においてテスト答案の採点・添削が対象化されたことはなかった。城谷武男が大学教育の一環として実施した添削の教育実践報告は貴重な検討といえよう³。城谷は自身の教育実践を考察し、添削は文書による個別指導であり、学生の目線からすれば、一種の密閉性をもつため羞恥心が強く人前での自己評価が苦手な人に適するとしている。また帰宅後の学習をじんわりと強要し、学習の習慣化を援助するとしている。教員の目線からすると、学生の理解できていない箇所が把握でき、個別の指導ができ、個々人との対応により親近感が生まれると述べている。しかし、中学生等の時期については言及されていないため検討する必要がある。

ところで、こうした自己評価能力育成との関係で看過できないのは子どものテスト観である。板倉はテストについて「小さい子どもはたいていテストが大好き」であるが、「学校にはいって間もなくすると、大部分の子どもはテストぎらいになる」と述べており、その理由は以下のように説明されている。

[†] Masahiro FUKUCHI*, Tsuyoshi MARUYAMA**:
Students' Perception of Test Value and
Correction of Examination Papers

Keywords: perception of test value, correction
of examination papers, educational evaluation,
elementary school students, junior high school
students

* Graduate of Utsunomiya University

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya
University

(連絡先: marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp 著者2)

「学校へ行くと、「自分の知識・能力が以前よりどれだけのびたか」という個人内での進歩の評価よりも、ほかから与えられた基準や他人との比較の上での評価が重視されるようになるのです。そこで、テストが重荷になってくるのです。」

しかし、これらの根拠は必ずしも明らかにされていない。教育評価問題を考える上で子どものテスト観は看過できないと思われる。そこで、小学生・中学生のテスト観を検討しつつ、教師によるテスト答案採点・添削の現状を確認することとした⁴。

2. 小学生・中学生のテスト観

子どものテスト観の検討に関しては、2019年11月、T県A小学校第1学年から第6学年までの児童226名、中学校第2学年の生徒25名を対象とし、無記名アンケート調査を実施した。

アンケートではテストの実施目的を自由記述で尋ねた(例、小学校第6学年用質問「あなたは「テスト」(まよめのプリント含む)は何のためにやっていると思いますか。あなたの考えを自由に書いてください。))。調査計画段階ではテストに対する好嫌意識(「テストは好きか」)を問う質問を設けていたが、調査対象校との協議において児童生徒にテストの意義に関して消極的な印象を与えないようにするため、好嫌意識を問う質問項目は設けないこととし、自由記述形式を採用することとした。各学年の回答は以下のとおり。

小学校第1学年(36人)では、「頭がよくなるため」あるいは「勉強ができるようになるため」という回答が多い(23人)。次いで「将来のためになる」という回答が多い(8人)。そのほか、「賞を獲得するため」や「褒められるため」という記述もあった。

小学校第2学年(52人)では、「頭がよくなるため」あるいは「勉強ができるようになるため」という回答が多い(16人)。次いで「将来のためになる」という回答が多い(12人)。第2学年になると、テストを「復習のため」、「自分の学習を確認するため」に行っていると認識する児童が現れ始める。また「教員が子どもの学習を確認する」という認識をもつ児童も見受けられた。

小学校第3学年(32人)では、「勉強したことを確認するため」にテストが行われているという回答が最も多い(13人)。次いで「将来のためになる」という回答が多い(8人)。「頭をよくするため」という回答は少数となり、復習や確認という認識をも

つ児童が増えている。また、家庭において子どもの成長を確認するためという認識をもつ児童もいる。

小学校第4学年(39人)では、「将来のため」にテストが行われているという回答が最も多い(19人)。次いで「勉強したことを確認するため」という回答が多い(13人)。勉強したことを確認すると認識している児童の中には「できていないところを確認する」といった具体的な回答も出始め、テストの活用方法に対する認識が深まっていることがわかる。また、第4学年から「学力を上げるため」にテストが行われているという認識をもつ児童が現れ始める。

小学校第5学年(38人)では、「勉強したことを確認するため」という回答が多い(23人)。次いで「将来のためになる」という回答が多い(20人)。「将来のため」という認識の中には、中学校への進学のためと考える児童もいる。「復習をするため」、「次のテストの予習」のように、テストを学習に生かすための手段であると考える児童も存在する。

小学校第6学年(29人)では、「勉強したことを確認するため」という回答が多い(13人)。次いで「将来のためになる」という回答が多い(8人)。誤答を確認するといった、テストの内容に目を向ける児童がいることがわかった。また「成績をつけるため」、「通知票に表示するため」、「教員が確認するため」という教員による評価、他者評価に関する回答が増えている。さらに、テストにより自分自身の学習意欲がわくと考える児童も現れ始める。

中学校第2学年(25人)では、「勉強したことを確認するため」という回答が多い(13人)。次いで「将来のためになる」という回答も多い(10人)。「将来のため」という認識には高校受験が関わっていることが回答から読み取れる。テストが自分の学習の目標になっていたり、学習意欲を引き出すための手段であると認識している生徒がいることは小学生と同様である。ただし、順位や偏差値を気にする生徒が存在することは中学校特有の現象である。

以上の結果から次の3つの特徴が指摘できる。

- (1) テストは各自の学習内容理解把握のために行われると認識している児童生徒は少なくないということである。低学年では「頭をよくするため」という記述が目立つが、学年が上がるにつれ、学んだことを確認するため、復習するため、という記述が現れる。テストは自分の学習に生かすために行われると認識している児童生徒は少

なくなかった。

- (2) また、すべての学年においてテストは「将来のため」に行われているとされていることも指摘できよう。低・中学年では「大人になったとき」という文言が用いられ、高学年以上になると「中学校」、「高校」、「社会」、「仕事」という単語が増え、特に中学校第2学年になると高校受験を意識した回答が増加する。
- (3) そのほか、学年が上がるにつれ、テストの目的が複数掲げられるようになり、目的の数が増加する傾向にある。特に第4学年から複数回答が多く見受けられるようになった。児童のテスト観の一つの転換点は第4学年にあると考えられる。

3. 教師によるテスト答案添削等の事例

教師によるテスト答案採点・添削に関して、教育実践事例の報告記事は皆無ではないが、子どもの自己評価能力育成との関係は考慮されていない。

そこで、今後の本格的な検討のための試行的、予備的調査として現職教員へのインタビュー調査を実施した。筆者らの周囲にいた現職教員にテスト採点の際、答案添削等を意識的に実施している教員の有無を尋ね、意識的な取り組みをしている教員にインタビューを申し入れた。3名（小学校2名、中学校1名）が調査に協力してくれた。

インタビュー調査の質問項目は以下の通りである。

- ・テスト答案の採点・添削や振り返りを日常的にどのように行っているか。／
- ・テスト答案添削や振り返りを重視するようになった理由や契機。／
- ・学級の児童生徒数（1回のテストで採点・添削する児童生徒数は何人か）。／
- ・テスト答案添削、振り返りを行うようになり、児童生徒に変化はみられたか。／
- ・テストを行う際に答案添削や振り返りは必要であると思うか。またそのように考える理由。／
- ・答案添削や振り返りを行うにあたって、受けもつ児童生徒の人数は何人が理想か。

- (1) 小学校教員K：自主学習ノートを用意し、誤答問題の再解答

小学校教員K（教員経験25年）が取り組みを始めたのは高学年を担任した8、9年前からであった。「自分で学ぶ力を育てたい」という思いから、児童に市販の家庭学習ノートを準備させ、日々の自主学習に取り組ませている（図1）。低学年でも自主学習に取り組めるよう自主学習のやり方を提示している（図2）。

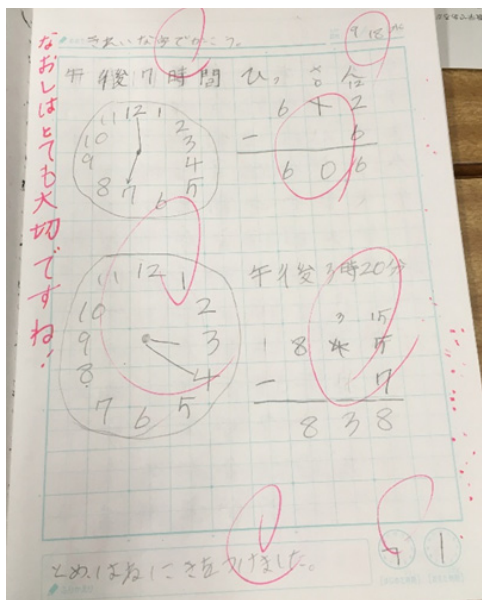


図1 児童（第2学年）の自主学習ノート

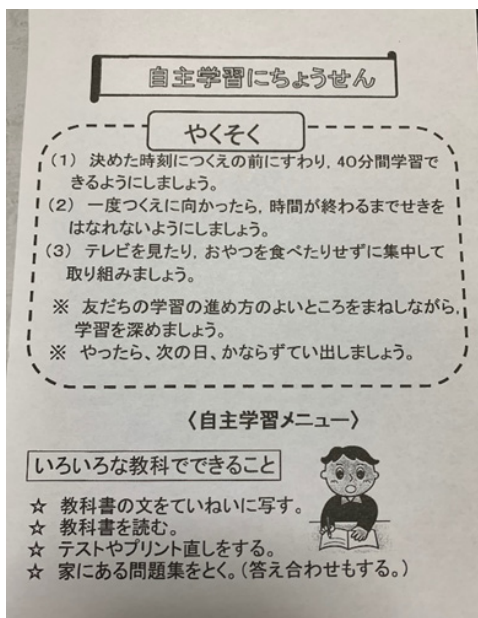


図2 自主学習の方法を示したプリント

こうした自主学習の一環として児童にテストの誤答再解答を行わせている。児童の変化としては、勉強することが苦ではなくなり、取り組みが積み重なることにより自分に自信がつくようになるという。また、児童がテストの点数を気にするかといえば、そのように感じることはないという。児童が自主学

習に取り組んだ際には教員がノートにコメントを記入しているが、児童数が35人だと一言しか記入できないという。コメントを楽しみに自主学習に繰り返し取り組む児童もいるとされ、人数は論点となることが示唆された。

(2) 小学校教員N：テスト答案添削を全校で実施

小学校教員N（教員経験18年）は、テスト答案添削等に取り組みたいと考えてはいたものの、なかなか取り組めずにいた。しかし「とちぎっ子学力アッププロジェクト」開始を契機として実践を始めたという。現在はテスト答案添削としてコメントを記入するだけでなく、授業において答え合わせを行った上で模範解答を利用しつつ児童個人で誤答訂正を行わせ、自主学習において誤答再解答に取り組ませている。その後、テスト答案添削は学校全体で取られるようになったという。児童の変化に関しては、各自のつまづきに気づき、やり直すことにより、学力向上に繋がっているのではないかと。児童がテストの点数を気にするか否かについては、保護者の言葉かけの影響のためか、改善されていないという印象をもっているという。テスト答案添削の際の人数に関しては、1学級の児童数が20人前後だと、丁寧に添削することができるのではないかと話した。

(3) 中学校教員H：NGレポート集作成、1回のテスト採点・添削で1本のボールペンを使う

中学校数学科教員H（教員経験36年）は、自身が学生時代に添削を受け、その意義を感じるようになり、教員就職5年目からテスト採点時に答案添削を行うようになったという。10年目以降、生徒に誤答の振り返りを行わせるようになった。定期テスト採点の際に添削を行うとともに、答案返却後、生徒に振り返りとして「NGレポート」（A4用紙2枚分で誤答再解答を行わせる）を作成させてきた。また、Hは小テスト実施や自己評価シート（解答に要した時間、正答数、感想を記入）作成も行っていた。多い時は一度におよそ200名分の添削をしており、1回の添削でボールペン1本を使い切ってしまうほどであるという。生徒の変化としては、テストを楽しむようになり、数学嫌いの生徒が減ったという。生徒は点数を気にするか否かという質問に対しては、保護者や学習塾が点数を気にしている場合、生徒は点数を重視してしまうのではないかと話した。答案添削については、生徒数に応じて対応の仕方も変わり、120人程度なら丁寧に添削できると話した。

4. まとめ

以上のことから次のことを指摘しておきたい。

第一に、テストを自身の学習を促進するためのものと認識している子どもはいずれの学年でも一定数存在するということである。しかし、学年が上がるにつれ、将来のため、教員が成績をつけるため、など本来の役割とは別の目的をあげる子どもが増え、学習成果の確認という意識は低下傾向をみせる。小学校第4学年が画期をなす。テスト実施の意義や目的をいかに理解させ、定着させるかが課題となろう。

第二に、子どもの自己評価能力を高めるために、テスト答案採点時の添削や振り返りを工夫している教師は少なからず存在するということである。今回の調査により、自主学習ノートによるテスト誤答再解答、NGレポート作成など、子どもに誤りを自覚させることを目的とした取り組みが行われていることがわかった。なかには一度のテスト採点時の添削においてボールペン1本を使い切るほど、コメントを記入する教員がいることもわかった。インタビューでは、実践後に子どもの学習意欲の高まりが語られていた。しかし、添削等では人数（や時間）によってコメント記入量が変わることも示唆された。

参考文献

- 1 「テスト」(test)と「試験」(examination)の相違に関しては天野郁夫『教育と選抜の社会史』、(筑摩書房、2006年)、同『試験の社会史』(増補、平凡社、2007年)を参照されたい。ここでは「テスト」と表記する。
- 2 板倉聖宣『教育評価論』仮説社、2003年、156ページ。該当箇所は『神戸大学工学部五十年史』(財界評論社、1971年、13ページ)からの引用。
- 3 城谷武男「学習主体形成についての覚え書—添削方式と自己評価」『学園論集』(北海学園大学)第86・87号、1996年、53-61ページ。
- 4 児童生徒のテスト観に関しては、野中陽一朗「児童生徒のテスト観の違いによる学習方略及び学習観の差異に関する探索的検討」(『高知大学教育実践研究』第30号、2016年)等の先行研究もあるが、自由記述ではなく、児童生徒の意識全体の把握が難しいと思われる。

令和2年4月1日 受理

Students' Perception of Test Value and Correction of Examination Papers

Masahiro FUKUCHI, Tsuyoshi MARUYAMA